紡錘形細胞型有棘細胞癌

熱傷瘢痕を母地とした紡錘形細胞型有棘細胞癌の
1 例

佐藤 一郎^{*1}, 小野 秀貴^{*1}

A case of spindle cell squamous cell carcinoma on the burn scar

Ichiro SATO ^{*1}, Hideki ONO ^{*1}

^{*1} Department of Dermatology, Odawara Municipal Hospital

We reported a case of spindle cell squamous cell carcinoma.

The patient was a 73-year-old man who developed an ulcerated nodule, 2.8×2.0cm in size, on the burn scar of the head. Histologically, the tumor was composed of disorderly arranged atypical spindle cells, and mitotic figures were often found. Immunohistological studies showed positive reaction of these cells for vimentin and CAM5.2. [*Skin Cancer (Japan)* 2001; 16: 251-254]

Key words : Squamous cell carcinoma, Spindle cell, Burn scar

はじめに

熱傷瘢痕を母地とした有棘細胞癌の中には、紡錘形細胞が錯綜して間葉系腫瘍様の所見を呈するものがある。今回我々はそのような紡錘形細胞型有棘細胞癌の1例を経験したので、若干の考察を加えて報告する。

症 例

患 者：73 歳女性

主 訴：左側頭部の結節

初 診：1996 年 6 月 12 日

既往歴、家族歴：特記すべきことなし。

現病歴：3 歳時に左側頭部に熱傷を受け、73 歳時（1995 年）に瘢痕部に腫瘤が出現し、潰瘍を伴い徐々に増大した。1996 年 6 月 12 日、当科を紹介受診した。

初診時現症：左側頭部に 12×10cm の熱傷瘢痕を認め、そのほぼ中央部に 2.8×2cm の不整形腫瘤を認めた（図 1）。

図 1. 初診時臨床像

^{*1} 小田原市立病院皮膚科

図 2．生検組織所見 (H.E. 染色)

図 3．ビメンチン染色像

a | b
c |

図 4．切除標本組織所見 (H.E. 染色)

臨床検査所見：特記すべきことなし。
熱傷瘢痕を母地とした有棘細胞癌を疑い、6月17日、皮膚生検を行った。
生検標本病理組織所見：腫瘍組織は真皮全層に認められ、紡錘形の腫瘍細胞が錯綜していた(図2)。熱傷瘢痕部に生じた紡錘形細胞型有棘

細胞癌 (spindle cell squamous cell carcinoma) を疑ったが、免疫染色ではビメンチン陽性で(図3), atypical fibroxanthoma (AFX), 悪性線維性組織球症 (malignant fibrous histiocytoma) 等の間葉系腫瘍も考えられた。
7月15日当科入院し、7月16日腫瘍切除お

よび植皮術を行った。

切除標本病理組織学的所見：HE 染色では、腫瘍塊を真皮上層から下層まで認めた(図 4a)。表皮には異型細胞、核分裂像が散見された。一部表皮から真皮にかけて連続的に腫瘍細胞浸潤が認められた(図 4b)。真皮において腫瘍細胞は胞巣を形成せずびまん性に拡大し、線維芽細胞様の紡錘形細胞が様々な方向に錯綜していた(図 4c)。

免疫染色では、単層上皮型ケラチン(ケラチン 8, 18)を染める CAM5.2 は紡錘形細胞の一部で陽性、表皮型ケラチン(ケラチン 1)を染める 34 β B4 は陰性であった。ビメンチンは一部で陽性、S-100 蛋白、CD34 は陰性であった。

経過：自験例は HE 染色像で腫瘍組織が錯綜する紡錘形細胞からなり、表皮から連続的に腫瘍細胞浸潤がみられたこと、免疫染色でビメンチンと単層上皮型ケラチンが同時に陽性だったことから、熱傷瘢痕部に生じた紡錘形細胞型有棘細胞癌と診断した。

退院後、外来にて経過観察中であるが、現在のところ患者に再発兆候はみられていない。

考 按

熱傷瘢痕部を母地として悪性腫瘍が発生した例は数多く報告されているが、多くは有棘細胞由来の熱傷瘢痕癌である。しかし熱傷瘢痕癌だけではなく悪性線維性組織球症、悪性黒色腫¹⁾、基底細胞上皮腫²⁾、脂肪肉腫³⁾、外毛根鞘癌⁴⁾といった種々の悪性腫瘍も報告されており、それらとの鑑別が必要なことがある。

自験例は HE 染色では肉腫様の組織像を呈し、免疫染色でビメンチン陽性であった。ビメンチンは本来線維芽細胞、血管内皮細胞などの間葉系細胞に広く分布し、間葉系腫瘍のマーカーとして用いられるものであり、自験例が悪性線維性組織球症等の間葉形悪性腫瘍であることも否定できなかった。しかし上皮系腫瘍においても分化度が低い場合にビメンチンが発現す

ることがあり⁵⁾、Smith らは表皮細胞が形態的、機能的に間葉系細胞に化生 (metaplasia) した場合、ビメンチン陽性になると推測している⁶⁾。

また、自験例は腫瘍組織で 34 β B4 が陰性、CAM5.2 が陽性であり、表皮型ケラチンではなく単層上皮型ケラチンが発現していた。ケラチンは、その分化によって(1)表皮型、(2)特殊型、(3)単層上皮型、(4)全上皮型に大別される⁷⁾。一般に有棘細胞癌におけるケラチンの発現について、高分化のものは正常上皮と同様に⁸⁾、表皮型ケラチンを認識する抗体によって染色されるが、低分化となるにつれ表皮型ケラチンは発現しなくなり、腫瘍細胞の一部が単層上皮型ケラチンを認識する抗体で染色されるようになる⁹⁾。

自験例は低分化型の有棘細胞癌であったため、ビメンチンおよび単層上皮型ケラチンが陽性になったものと思われた。

紡錘形細胞型有棘細胞癌の進展形態は、個々の腫瘍細胞が大部分紡錘形をとり、表皮からの連続性や細胞間橋に乏しく、真皮に非連続的に浸潤している点で通常の有棘細胞癌と大きく異なる。組織学的悪性度は Grade IV に相当し、形態的に未分化である。熱傷瘢痕部に生じやすいといわれるが、その理由は明らかではない。

自験例が組織学的に紡錘形細胞型となったのは、個々の腫瘍細胞が病変部に適応した結果とも考えられた。すなわち病変部の真皮全層には線維組織が密に増生しており、通常の有棘細胞癌のように腫瘍組織が表皮から胞巣をつくりながら連続的に進展することが困難であった。そのため腫瘍細胞が細胞間橋を解消し、紡錘形をとりつつ線維細胞間に浸潤したものと思われた。

最後に予後についてであるが、自験例は切除標本が断端陰性であり、術後 4 年以上経過した現在も再発兆候はない。しかし本例と同じくビメンチン陽性の紡錘形細胞型有棘細胞癌について予後不良例¹⁰⁾が報告されており、今後の注意深い follow up が必要と思われた。

文 献

- 1) Alconchel, M.D., Olivares, C., Alvarez, R. : Squamous cell carcinoma, malignant melanoma and malignant fibrous histiocytoma arising in burn scars. *Br. J. Dermatol.*, 137 : 793-798, 1997.
- 2) Koga, Y., Sawada, Y. : Basal cell carcinoma developing on a burn scar. *Burns*, 23 : 75-77, 1997.
- 3) Nishimoto, S., Matsushita, T., Matsumoto, K., et al. : A rare case of burn scar malignancy. *Burns*, 22 : 497-499, 1996.
- 4) Ko, T., Tada, H., Hatoko, M., et al. : Trichilemmal carcinoma developing in a burn scar. *J. dermatol.*, 23 : 463-468, 1996.
- 5) Lane, E.B., Hogan, B.L.M., Kurkinen, M., et al. : Coexpression of vimentin and cytokeratin in parietal endoderm cells of early embryo. *Nature*, 303 : 701-704, 1983.
- 6) Smith, K.J., Skelton, H.G., et al. : Spindle cell neoplasms coexpressing cytokeratin and vimentin(metaplastic squamous cell carcinoma). *J. Cutan. Pathol.*, 19 : 286-293, 1992.
- 7) 北島康雄 : 中間系フィラメントの基礎と腫瘍診断. *臨床皮膚*, 43(3) : 217-225, 1989.
- 8) 渡辺晋一 : 上皮系皮膚腫瘍におけるケラチン発現の特徴. *帝京医学雑誌*, 18(5) : 1-9, 1995.
- 9) 市川栄子, 渡辺晋一, 大塚藤男 : 皮膚有棘細胞癌におけるサイトケラチン発現の免疫組織化学的検討. *日皮会誌*, 103(8) : 1043-1052, 1993.
- 10) 畑康樹, 秋山真志, 山田晴義, 他 : 多彩な病理組織像を呈した熱傷瘢痕癌の 1 例. *臨床皮膚*, 48(12) : 1127-1131, 1994.